科学ミステリー

ジャーネくんの赤いひみつ

斎藤　栄

絵 鵜田　幹

ジャーネくんの赤いひみつ

斎藤　栄
絵 鴇田　幹

913

斎藤　栄

ジャーネくんの赤いひみつ

講談社　1979

215p　22cm（児童文学創作シリーズ）

さいとう　さかえ

ジャーネくんの赤いひみつ

昭和54年11月20日　第1刷発行

定価980円

著　者　斎藤（さいとう）　栄（さかえ）

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112

電話　東京03(945)1111(大代表)

振替　東京8-3930

印刷所　廣済堂印刷株式会社

製本所　大製株式会社

斎藤　栄　1979　Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8093-190031-2253 (0)　　（理科）

もくじ

第一章　たから島への旅行……5
第二章　大秘宝のとうなん……35
第三章　犯人はだれだ？……67
第四章　ゆうかいされた子……97
第五章　こうほねの赤……127
第六章　空の北斗七星……158
第七章　手品のたねは……187
著者からご両親へ……214

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　たから島への旅行

1

「やったあ！」

ジャーネは、思わずとびあがった。こんどの夏休みに、瀬戸内海の地獄島へ行けることになったからだ。

「アッちゃんといっしょだけど、なかよくするんですよ。それがじょうけんで、お父さんがきょかなさったんだから。」

ジャーネのお母さんがいった。

「わかってる、わかってる。ぜったいに、けんかはしないよ。」

ジャーネはわらいながら答えた。

ジャーネには、平井哲という本名があるが、通っている光洋台の公立小学校の六年生は、だれでも哲のことを「ジャーネくん」とよぶ。なにかにつけて、「じゃあね！」というのが口ぐせだからだ。

こうしたあだ名は、となりに住む、アッちゃんこと、菊地友子のばあいもにたようなものである。友子も、「あっ、失敗したわ。」とか、「あーあ、だめだめ。」などとよくいうので、みんなにアッちゃんとよばれている。アッちゃんは、地元の光洋台にある私立小の五年生だった。

とにかく、夏休みに、瀬戸内海の地獄島へ行けるのは、ジャーネがきょねんからいだいていたゆめなのだ。地獄島というのは、四国の北側にある小さな島の一つだった。この島は、源平の合戦に、屋島をのがれた平家の軍船が流れつき、平家の武将ら三十人と、官女など二十人の合計五十人が自害して死んだ場所といわれる。

豊臣がほろんだときも、大坂城からにげだした武士たちが、ここへしばらくひそんでいたという。

こうした話を、ジャーネは、横浜新聞の記者をしているお父さんから聞いて、行きたくて行きたくてしかたがなかった。しかし、島には三げんの半農半漁の人々が住んでいるだけで、生活は

すこぶる原始的でふべんなのである。
「ふべんなところって、行ってみたいよ。」
と、ジャーネは両親にせがんでいた。
すると、ジャーネのお父さんがたまたま、島に住む木村半兵衛という六十さいの老人と知り合いになり、
「もし、お子さんが来たいというなら、キャンプでもするつもりでどうぞ。」
といってくれたのだ。
話はとんとんびょうしでまとまった。ジャーネのお父さんは、仕事のつごうで行かれないため、お母さんがついていくことになった。
「わたしだけでは心細いわ。おとなりのおくさんもいらっしゃるなら。」
ジャーネのお母さんは、親しいアッちゃんのお母さんに声をかけた。
アッちゃんのお母さんは、わかくてスポーツずきの陽気な人だから、一も二もなく、
「ええ、ええ。そういうお話は大さんせいですわ。キャンプは学生時代、何度もしておりますし……。」
と、すぐに地獄島行きをしょうちした。

じっさいには、半兵衛老人の広い家にとまれるのだから、キャンプ生活より楽である。しかし、島にはガスも電気も、むろん、水道もないという。

水は、島の中央にある、たった一つの深いいどから、つるべでくみあげなければいけない。ガスはないから、石油コンロを使っている。明かりは、石油ランプだけという心細い生活である。

だいたい、明治時代の初めのころの、へいきん的日本人の生活だと思えばいい。

「そのかわり、なんといっても、星が美しいそうだよ。海の水もきれいだ。そういう大しぜんの中で、テレビや電話もなしに生活してくるのは、きっと役に立つことがあるだろう。」

と、ジャーネのお父さんはいった。

「あら、テレビのないのはいいけど、電話のないのは不安だわ。万一、病気になったとき、どうすればいいの？」

ジャーネのお母さんは、母親としてとうぜんの心配をした。

「いざとなれば、木村さんが、小ぶねを出して対岸へ行ってくれるというんだ。小ぶねで一時間くらいのきょりだというから、そうこわがることはないよ。」

お父さんはわらった。

「一週間はすこし長い感じね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

お母さんは、なんとかして、お父さんといっしょに行きたいのだ。
「だいじょうぶ。それに、アッちゃんとこのお母さんがいっしょだもの。あのひとは、かんごふのしかくをもっているし、すこしぐらいの病気には、なんの心配もいらないさ。」
お父さんは、あくまでも楽天的であった。ジャーネには、私立小三年生の妹の博子がいる。博子のニックネームはピーちゃんだ。ピーちゃんは、お母さんといっしょなら、どこへでも行くと、もう大はりきりであった。

2

ジャーネ兄妹とアッちゃん、それに両方のお母さんたち一行五人は、新倉敷まで新幹線で行った。そこから瀬戸内海の小さな漁村までタクシーを走らせた。
地獄島の半兵衛じいさんは、島にある小ぶねで五人をむかえにきてくれていた。しょうじきで、しんせつそうな半兵衛じいさんの顔の皮ふは、まるであつい皮のように、てらてらきんぞく的な光をはなっていた。
「さあさあ。ここからはもうしぜんだけの世界じゃからの。そのつもりでな。」

そういわれると、ジャーネのお母さんは急に心細そうなひょうじょうをした。
「こんな小さなふねで、島まで行けますか？」
と、お母さんはじいさんにきいた。
「だいじょうぶ。三十年間、一度も、このふねはひっくりかえったことがないでな。」
はっきりいわれると、だまってしまうよりなかった。
ジャーネはアッちゃんに、
「都会のことを、ぜんぶわすれて遊んでこようね。」
といった。
「島にはやまねこみたいな動物、いるのかしら？」
アッちゃんは動物ずきなので、それが気にかかっていたのだ。
「そりゃ、いますよ。りすにうさぎ・さるも……。」
「わああい。ばんざい。」
ピーちゃんは、ひとりではしゃいでいる。
ふねは小さかったが、海が静かだったのと、半兵衛じいさんのうでがいいので、焼き玉エンジンの音はすこしうるさかったが、ぶじに五人は地獄島ただ一つの船着き場にとうちゃくした。

K. TOKITA

そこから見ると、島の東側に、にょっきりそびえているみょうな形の山が目にはいった。まるで人間のずがいこつみたいに見える。

「あの山はなんというの？」

アッちゃんがこわそうに、半兵衛じいさんにきいた。

「見ただけでわかりませんかの。あれはがいこつ山というんですじゃ。」

「がいこつ山か……。おもしろいんだね。」

ジャーネがことばと反対に、こわそうにつぶやくと、じいさんはふふとわらった。

「この地獄島では、むかし、おおぜいの人がなくなっているので、いろいろきみょうな名がついた場所ばかり多いでな。死沼とか、身投げがけ、首つりまつというように。でも、安心しなさい。わしらは何十年もここにいるが、あぶない目にあったことはない。」

「ほんとうでしょうねえ。子どもたちがもし……。」

と、ジャーネのお母さんは、アッちゃんたちをさそったことが、とても気になっているようすだった。

「平気よ、おくさん。子どもたちには、おもしろそうな名まえがついているほうがいいのよ。」

アッちゃんのお母さんは、ぜんぜん、気にかけていないらしい。しかし、ジャーネが見た島

は、島全体があれはてていて、人間の住むことができない世界のように思えた。島の上を、風がおそろしい声をあげてふきぬけていた。

船着き場から、木村さんの家へは、白すなの海岸ぞいに、細い道を行くと、ちょうど、がいこつ山の南側に、二けんの家がある。東のほうの家に半兵衛じいさんとそのおくさんが住んでいる。広さは、十じょう二間と八じょう二間の、平家づくりだった。

「広いだけがとりえですわい。」

じいさんはわらった。

そのとなりには、森田一郎さん夫妻の家がある。わかい人で、三年まえまでは東京の証券会社につとめていた。サラリーマンがいやになって、移住してきたのだという。島には、あと一けん、西のはずれ、死沼のそばに、中年の北島進という男が一人でくらしている。

木村さんの家に着くと、半兵衛じいさんのおくさんは、六十さいとは思えないくらいしゃんとしたからだで、出むかえてくれた。

「きょうは、もう日がくれるで……。おふろにはいって、ゆっくり休みなされ……。」

そういってくれたが、家のどこにも浴室はなかった。

きょろきょろしているジャーネを見て、じいさんは大声でわらった。

「ふろというのは、そこにあるドラムかんよ。たぶん、もうわいとるじゃろう。新しいげたがあるから、それをはいて中へはいりなさい。げたをはかないと、足のうらをやけどするから……。」

3

よくじつは快晴だった。

「あとで案内してやるでな。朝めしのあとまで待ちなさい。」

じいさんがいってくれたけれど、ジャーネとアッちゃん・ピーちゃんの三人は、待ちきれずに、顔をあらったら、すぐに家の外へとびだしていった。

「ぼうけんしてこよう。帰ってくると、朝ごはんがうまいよ、きっと……。」

ジャーネがいうと、アッちゃんも、

「たんけん隊出発よ。」

と、大はりきりだった。

「行こう、行こう。」

ピーちゃんもまけずに、島の中央目ざしてかけだした。森田さんの家の前をつうか。このと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com